

スイッチとおもちゃの因果関係

スイッチを「教材」として使う場合、まずは「スイッチを押したらおもちゃ(電化製品)が動く」という因果関係の理解を促す必要があります。この理解が定着していないと、後の学習も定着しにくくなるのでとても大切な一歩です。また、特別なスイッチを用いなくても「部屋の電気を点け消しする際、子どもと一緒にスイッチを押す」などの取り組みを重ねることで、因果関係の理解を促すことができます。



教材から離れすぎると…

授業中に車いすやバギーに乗ったまま活動する場合、教材に手が届きにくいことがよくあります。そんな時に長い棒に筆やローラーを付けて教材に届くように工夫することもよく見られます。

しかし、あまりに子どもと教材の距離が離れすぎていたり、子どもの視線が教材に向いていなかったりすると活動の達成感を得られにくくなります。そのため、子どもと教材の距離は適切か？子どもが自分の活動を見ることができるポジショニングをしているか？について、丁寧に考えながら支援することが重要になります。



スイッチとおもちゃの距離を考える

スイッチを使う場合も子どもと教材(おもちゃ)の距離はとても重要になります。

はじめてスイッチを使いおもちゃとの因果関係の理解を促す場合、「スイッチそのものがおもちゃになっているもの」「スイッチ自体が光ったり振動したりするもの」を選ぶと良いと言われています。

逆にスイッチとおもちゃの距離が離れすぎていると両者が同時に視界に入りにくくなり、因果関係を理解しにくくなります。

スイッチとおもちゃが一体となっているものの例として、本校の教材教具集No.40「振動グリップスイッチ」やNo.57「サイレンスイッチ」などが挙げられます。



本校ホームページ教材教具集リンク



教材教具集No.40「振動グリップスイッチ」



握ると振動するスイッチです。

教材教具集No.57「サイレンスイッチ」



押すとライトが光り、パトカーのサイレンが鳴るスイッチです。